

## 未低利用資源でツブを獲る

### — つぶかご漁業用の餌料開発を目指して —

北海道におけるツブ類は、漁獲数量が約8,000トン、生産金額が約30億円（平成22年度）と、貝類ではホタテガイに次いで、2番目に多い種です。そのうち、日高～釧路管内では、漁獲数量、生産金額とも全道の約8割を占めています。現在、ツブ類は、かご漁で漁獲されており、餌料（おびき寄せるエサ）には、天然のマイワシなどの冷凍魚が用いられています。マイワシの餌料は漁獲が良いのですが、餌料代（160円/kg）の負担が大きく、漁業者を悩ませています。さらに、つぶかご漁では、通称「シオムシ」と呼ばれる全長5～10mm程度のヨコエビ類による食害（エサが横取りされる）のため、漁獲効率の低下が問題となっております。このため、漁業者からは、餌料代の負担が少なく、ヨコエビ類による食害に強い、持続性に優れた餌料の開発が望まれています。

釧路水試では、平成24年度に、広尾漁業協同組合エソバイツブ漁業部会、十勝地区水産技術普及指導所等の協力のもと、エソバイツブを対象にマイワシに比べ安価な小型サンマ（60円/kg）やカジカ類など未低利用資源を餌料（冷凍魚）に用いた試験を行いました。その結果、餌料に小型サンマを用いた場合では、マイワシを餌料に用いた場合と同等の効果があり、良好な蠕集性（漁獲物が集まる）が認められました。しかし、未低利用資源を用いた餌料（冷凍魚）では、食害の抑制や蠕集効果の持続性の効果については、確認できませんでした。

そこで、公募型研究（H21-23）「漁家経営安定を推進するえびかご漁業用ロングライフ人工蠕集餌料製造システムの開発」で得られた、食害に強く、持続性に優れたえびかご用餌料の製造技術を活用することとしました。

今年度（平成25年度）は、この研究を活用し、つぶかご餌料のヨコエビ類による食害の軽減や繰り返し使用による持続性の効果を検討することにより、新たな餌料開発に結びつく技術支援を行い、つぶかご漁業の効率的な漁業生産の推進を図っていきます。

なお、平成25年度は、道総研の職員研究奨励事業（技術支援型）により行います。

（北海道立総合研究機構釧路水産試験場 加工利用部 阪本正博）

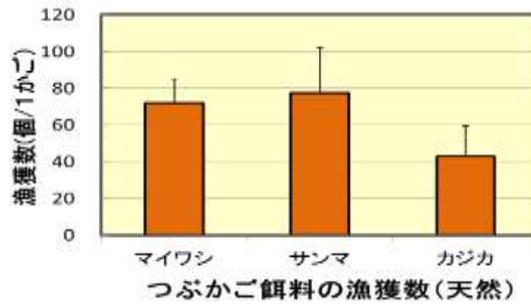
未低利用資源



小型サンマ



カジカ類



・安価な小型サンマでもマイワシと同等の漁獲が可能

公募型研究(H21-23)「漁家経営安定を推進するえびかご漁業用  
ロングライフ人工蛸集餌料製造システムの開発」

人工餌料

蛸集原料  
スラリー

蛸集原料  
凝固剤(Ca剤)

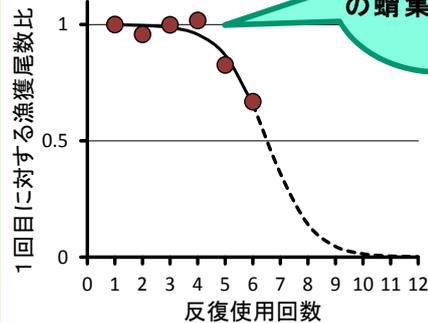
アルギン酸  
Na水溶液

アルギン酸Na  
凝固遅延剤  
(リン酸塩)

撈拌・混合



凝固・切断



食害に強く、持続性が高い

えびかご用餌料技術の活用

未低利用資源を用いた、食害に強く、  
持続性に優れたつぶかご用餌料の開発